大都市内古集落を核とした市街地およびコミュニティの変容に関する研究

A study on the alteration of old village’s urban area and community at the core

杉本容子・鳴海邦顕
Yoko Sugimoto and Kunihiro Narumi

In Osaka some old villages have remained and endure their form through the modernization. Now they almost have small shrine and conventional festivals, so it is possible that old village’s residents are at the core of local community formed from old village and the surrounding urban area.

Firstly, We clarified the changing process and real condition of the old village’s community keeping their conventional festival by analysis of the urban area alteration at spatially macro and micro level. Secondly, we identified the role of the old village’s community in their conventional festival management, and lastly considered the contemporary characteristics and issue about it.

Keywords: 古集落、地域コミュニティ、市街地変容
Old Village, local community, urban area alteration

1. はじめに

大阪市内には、明治以前から存在する農村集落や街道集落など、近代以降の都市発展によって周辺を市街地に取り囲まれながらも、いまだに集落形態を存続している集落が存在している。本研究は、それらを「古集落」と名付け、その市街地整備の方向性を、周辺市街地と一体となって構成される地域の住環境保全という視点から検討する一連の調査研究1の一部をなすものである。

都市における地域コミュニティの喪失が叫ばれるなか、多くの古集落では、神社での伝統的祭りに代表されるような地域コミュニティ活動が現在でも盛んに行われ、それらを継承し支えている旧来コミュニティが存在し続けている。旧来コミュニティとは、基本的に古集落の元々の住民によって構成されてきたコミュニティをいうものとする。コミュニティは地域環境を支える主体であり、このコミュニティのあり方に将来の地域環境の姿がかかっているといっても過言ではない。古集落の旧来コミュニティについては、それを自体をどのように存続させていくかという課題がある一方で、周辺市街地に対して古集落の旧来コミュニティが核になり、地域コミュニティを形成しうるという可能性も考えられる。

上記のような観点から、伝統的祭りを持つような旧来コミュニティの可能性を検討するにあたり、古集落とその周辺市街地の変容という空間的な視点から旧来コミュニティの変容の過程と現状を捉えることが必要であると考えられる。

そこで本研究は、大阪市内において伝統的祭りが継承されている古集落を対象として、その周辺市街地の発展過程と古集落内部の宅地変容を分析することによって、旧来コミュニティを構成する居住者の変質過程と現状を明らかにし、さらに伝統的祭りにおける旧来コミュニティの役割を明らかにすることを通じてその今日的な特性を考察する。

2. 研究対象の選定

近代以降、古集落は近接する大都市の発展と密接に関係しながら存続してきたため、大阪市中心部との立地関係によって市街化の歴史が異なり、それによって旧来コミュニティの変容も異なる過程を経るものと考えられる。そこで本研究では、大阪市内で集落形態を存続している古集落の中から、大阪市中心部に近い東成区旧大今里村地区と緑辺部の平野区旧長原村地区の2地区を対象とし、図1にその立地を示す。

両地区ともに大阪と周辺都市をつなぐ街道が集落内をとり、比較的規模が大きく、周辺の小規模集落群の中心的な存在であったという点で近世以前までの集落の特徴が類似している。また、現在行われている伝統的祭りについても、地車が巡行されたり神社境内で夜店が行われるなど、祭り自体

正会員 大阪大学大学院工学研究科（Osaka University）
の形態に類似する点が多い。以上から、近代以降の市街地変容による旧来コミュニティの変質の過程および現在の伝統的祭りにおける役割を比較検討するに適すると判断した。

また、旧来コミュニティの範囲を明確にするため、明治18～23年に作成された1/20,000地形図を現在の1/2,500地形図にオーバーレイし、居住地である古集落の範囲と、それを含めた生産領域を旧村域として抽出し、これを調査対象範囲とした。

なお、以下で取り扱う面積は、CADソフト（Vector Works8.5）で作成した図から得たものである。

3. 古集落を核とした市街地発展と町会の領域

ここでは、マクロな視点で旧来コミュニティの領域的な変貌について考察するため、近代以降の市街地変容と町会領域の関係を分析する。まず明治20年以前の5時点の市街化時期および基盤整備事業の区域を1/2,500地形図にプロットし、市街地発展図を作成した。次に、市街地変容を担った住宅開発の状況を明らかにするため、公的住宅開発の区域およびまったミニ開発の区域、集合住宅および長屋が建設されている区画をプロットし、最後に町会及び連合町会の領域をオーバーレイした。表1に、各対象地区の市街地発展、市街地発展を担う住宅開発分布および町会領域を示す。

(1) 中心部付近の古集落（旧大今里村地区）

① 市街地発展と住宅開発

大阪市の東部、東成区に位置する旧大今里村地区は、大阪市中心部に近く、大正14年第二次市域拡張の際に大阪市域に編入された地区である。

大正期に大阪市営市街の工場進出とその労働者のための長屋住宅建設が盛んなわれ、古集落は急速に市街地に取り囲まれた。昭和初期になると、市街化を予想した地元住民が組合を結成し、耕地整理事業もしくは土地区域画整理事業を行うとともに、賃貸長屋住宅を建設して手広く宅地経営を行う動きが大阪市各地に広がった(5)。

② 市街地形態と町会領域の関係

旧大今里村地区の旧村域は4連合町会の35町会、古集落の範囲は2連合町会の4町会に属している。

本来一つの村だった旧来コミュニティが拡大・高密度化し、隣組を経て町会という新しい形をとるにあたって分

### 表1 市街化過程と町会領域

<table>
<thead>
<tr>
<th>市街地発展図</th>
<th>住宅開発図</th>
<th>町会領域図</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>凡例</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>明治20年</td>
<td>昭和35年</td>
<td>基盤整備</td>
</tr>
<tr>
<td>明治44年</td>
<td>昭和56年</td>
<td>旧村域</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和7年</td>
<td>平成12年</td>
<td>公営住宅開発図</td>
</tr>
<tr>
<td>集合住宅</td>
<td>長屋</td>
<td>旧村域</td>
</tr>
<tr>
<td>連合町会</td>
<td>古集落の範囲</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>町会</td>
<td>旧村域</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
割されている。また、町会の上位組織である連合町会の
領域をみると、幹線道路で区切られる範囲まで拡大した
旧来コミュニティが等分するように分割されたことが分
かる。一方、基盤整備地区は街区を单位として町会が構
成されている。100戸程度の規模のマンションが単独で
町会を構成することもあるが、町会の規模はおおよそ2
00戸程度で平均化されている。

(2) 市域縁辺部の古集落（旧長原村地区）
① 市街地発展と住宅開発
大阪市の東南部、平野区の南部に位置する旧長原村地
区は、中心部から離れた市域縁辺部に立地し、昭和30
年、大阪市に編入された地区である。
戦前まで農村の形態を維持していた当地区は、戦後急
速に周辺が市街化した。大阪市に編入された経緯も、人
口増加の受け皿として広大な農地の存在があったためで
あり、昭和34年の長吉長原東市営住宅団地の建設を皮
切りに、総面積32.0ha、総供給戸数5,527戸に及び大規
模な公的住宅開発が行われた(9)。一方、住宅団地と
古集落の間に残された未市街化地区には、戸建住宅のミ
ユニットが行われるなど無秩序に市街化が進行しつつあっ
たため、昭和52年から長吉破壊地区土地区画整理事業
が施行された。
近年では、区画整理街区内を単位としてマンション建
設が行われるなど、さらなる市街化の進展がみられるが、
依然として農地や資材置き場、駐車場などのままで残った
未利用地が残されている。
② 市街地形態と町会構成の関係
旧長原村地区の旧村域は2連合町会の22町会、古集落
の範囲は1連合町会の1町会に属している。
町会の領域は、大阪中央環状線によって旧村域が二分
された以外、全体が「公営住宅団地」と「それ以外の全
てを合わせた旧来コミュニティ」という構造になっている。
古集落を核として市街地拡大する以前に、公的開発
による住宅団地が飛び地として市街地を形成したため、
公営住宅団地は旧来コミュニティから分離して新しく町
会を形成したためである。
旧長原村の旧来コミュニティを受け継ぐ長原町会は、
土地区画整理事業施行以前は道路が入り組んでおり、町
会を分割する際の境界を決定できなかったこと、また町
会のリーダーシップを有する人材が旧来コミュニティに集
中していたことなどから、広い町会の領域を分割できず
に周辺のミニュ開発、マンションなどの個別開発による新
規居住者を受け入れ続けている。
4. 古集落内部の市街地更新と旧来居住者の動向
以上では、マクロな視点で古集落を核とする旧来コミュニ
ユニティの領域的な変容を明らかにした。ここでは、古
集落体と旧来コミュニティの変質をミクロな視点で捉
えるため、古集落の範囲内の宅地変容と旧来居住者の居
住動向・転出状況について、住宅図面(10)による調査を
行った。
まず、1/2,500地形図と住宅図面から平成14年時点の
宅地割を確定し、それを基準として昭和55年と昭和35
年、計3時点の宅地割を作成した(4)(5)。各住宅につい
て、居住者氏名のみが記載されているものを住宅単位、
店舗名も含む会社名等が併記されているものを店舗付き
住宅や事業所付き住宅などの住宅併用として判断した。
次に、昭和35年に住宅図面に記載されている居住者氏
名を得ることによって、旧来居住者の居住動向・転出状
況を推計した。従って、ここでは厳密には旧来コミュニ
ティを昭和35年時点の居住者とし、分析を進めている。
(1) 古集落内部における宅地変容の特徴
表2に各対象集落の宅地および旧来居住者の分布、宅
地数の経年変化、旧来居住者の居住動向を示す。
昭和35年時点で旧大今里村地区が総合地数433平均面
積88.4㎡、旧長原村地区が総合地数210平均面積379.4
㎡となっているが、大阪市中心部に近い旧大今里村地区で
は早い時期に宅地分割が広く展開したことが推察できる。
しかし、その後の経年変化では、旧大今里村地区は併合
化が進んで平均宅地面積が小さくなる一方、旧長原村地
区は約40年間で宅地数が約1.5倍に増加して宅地の分割
化が進行していることが分かった。
集合住宅はもちろん旧来も昭和55年以降に建設が始ま
っている。連続した細長い長屋建ての宅地が併合化して
アパートが建替えられる以外に、大規模な宅地を更に拡大
してマンションなどが建設される例はなく、古集落の内
部で開発される集合住宅の平均宅地面積は、旧大今里村
地区167.4㎡、旧長原村地区231.7㎡(6)と、各地区の全
体平均と同じほど大きくないことが分かれる。
店舗や事務所などを併用している住宅は、どの時点で
も宅地全体の1/5前後を占めている。それらは昭和35年
時点ででは街道沿いの小さな宅地に集中していたが、そ
後の居住者離れて散在する傾向があり、街道は市面で食
品売買や販売店等を営んでいた居住者が店舗を開める一方で、
比較的宅地規模の大きな農家が自宅で事務所を開くよう
になったことが分かる。
(2) 旧来居住者の動向と宅地変容の関係
図2に旧来居住者の居住動向と宅地変容を示す。旧来
居住者について、旧大今里村地区では約7割、旧長原村
地区では約5割の転出がみられる。いずれも第二期（昭
和55～平成14年）よりも第一期（昭和35～55年）の間
に転出した割合が高い。また、全体として旧来居住者が
転出する場合に区画変更を伴う割合が高くなっている。両地区を比較すると旧大今里地区よりも旧長原地区の方が旧来居住者の宅地変更の割合が高い傾向があり、その変更内容をみると、旧大今里地区では併合化、旧長原地区では分割化がそれぞれ最も多くなっている。

図3に、各時点で居住を継続している旧来居住者と地区全体の平均宅地面積の経年変化を示す。

旧大今里地区の場合、古集落周辺にマンションやガレージを経営して収入を得ている地主が、自宅に隣接して所有していた長屋やアパートを併合して自宅を広くしたことや、長屋の居住者が隣接する部屋を併合して戸建に建て替えられたことなどから、継続居住している旧来居住者の宅地平均面積が大きくなっていると考えられる。

旧長原地区の場合、先々大規模な宅地に居住していた旧来居住者が、自宅の広さを確保しながら土地を切り売りしたり分家住宅を建設するなどして住み続けているために、宅地分割が行われても旧来居住者が住み続けている宅地規模はある程度維持されていると考えられる。

また、分割変更をともなって転出する旧来居住者の割合が高いことから、大規模な宅地を所有する地主が転出しに向けて開発を行い、狭小宅地が増加した結果全体平均が著しく低下したと考えられ、継続居住している旧来居住者と全体平均の差が大きく開いた要因と考えられる。

以上から、両地区ともに分割や併合などの宅地変容が進行しながらも、大きな宅地に住む旧来居住者が残り、住み続けていることが明らかとなった。

5. 伝統的祭りにおける旧来コミュニティの役割

以上で明らかにした旧来コミュニティを受け継ぐ町会と旧来居住者が現代における伝統的祭りのなかでどのような役割を果たしているかを明らかにするため、祭り運営についてのヒヤリング調査、運営参加者に対するアンケート調査、祭り当日の観察調査を行った。表3に、調査対象とした伝統的祭りの概要、地場巡行路及び提灯の飾りつけられた住宅の分布を示す。

表2. 宅地変容と旧来居住者分布

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>昭和35年</th>
<th>昭和55年</th>
<th>平成14年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>旧大今里地区</td>
<td>住宅専用</td>
<td>住宅併用</td>
<td>集合住宅</td>
</tr>
<tr>
<td>総宅地数</td>
<td>433</td>
<td>395</td>
<td>38</td>
</tr>
<tr>
<td>旧来住宅数</td>
<td>210</td>
<td>181</td>
<td>29</td>
</tr>
</tbody>
</table>
野大神宮を奉斎する個人と、旧大今里村と旧東今里村を合わせた旧村域（7）の54町内会から1～2名ずつ選出した代表で構成されている。従って、町会は熊野大神宮奉斎会を通じて間接的に運営に参加している。地車巡行およびその経路については、各地車保存会によって年毎に決定され、平成14年度は東今里神路地車保存会のみが地車巡行を行った。旧東今里村の村域を対象範囲とし、地車を巡行させており、その結果旧村域をカバーする町会群の領域内を巡行することとなっている。

② 旧長原村地区的志紀長吉神社秋祭り
長原町会が町内会で結成する秋祭り実行委員会が祭り運営の全てを担当している。地車は3台あり、これらはどれも旧長原村が池を売却して得た資金で購入され、現在は長原町会の所有になっている。そのため、地車は旧村域から公営住宅地を除いた町会領域を対象範囲として巡行している。

(2) 伝統的祭りの参加者実態と旧来居住者
① 組織による運営活動への参加者実態
これまでに明らかにした旧来コミュニティを受け継ぐ町会という組織の中で、実態としてどの程度旧来居住者が祭り運営に支えているかを把握するため、祭りの運営参加者にアンケート調査を行った。調査の目的から、参加の実態を伴わない組織構成員は調査対象として適さないこと、参加の程度を厳密に規定することが困難であることなどから、祭り運営組織の会合の場で集まっていた参加者に直接任意でアンケートを依頼する手法が適当だと判断した。調査の結果、旧大今里村地区43票、旧長原村地区42票の回答を得た。回答者の平均年齢は44.2歳、男女比は男性74.1％、女性25.9％であった。

図4に示す回答者の居住経歴をみると、市街化が早い時期に進んだ旧大今里村地区では継続居住4代目から転入者まで比較的均等に運営に参加している一方、戦後急速に市街化した旧長原村地区ではほとんどが継続居住4代目及び転入者によって運営が行われていることが分かり、それぞれ市街化の過程に対応しているため、得られた回答はある程度の信頼性をもとめた実態であると確認できた。

居住経歴から継続居住者を旧来居住者とし、転入者と参加実態を比較したところ、運営に参加するようくなってからの平均年齢は両地区ともに旧来居住者の方が1年程度長くなっていたが、全体として10年前後の運営経歴があり、参加者が継続的に運営に参加していることが分かった。また、「子供や孫に祭りを体験させるか」という質問に対しては、両者ともに約半分が何らかの形で体験されていることが分かった。また、旧来居住者に対して「子供の頃にも調査対象とした伝統的祭りに関わっていたか」とถามたところ、旧大今里村地区で91.7％、旧長原村地区で78.6％が関わっており、昔から住んでいる居住者が子供の頃から伝統的祭りがある環境に慣れ親しみ、成人してから運営に参加して地域の伝統的祭りが継続されていることが分かった。

図3 継続居住旧来居住者の平均宅地面積
② 個人による運営活動への参加者実態

3章および4章で行ったように、古集落とその周辺市街地という空間的な視点によって祭り運営に参加の実態を把握するため、祭り当日に玄関先に提灯を飾っている戸建で住宅を確認した。これらは居住者が個人的な意志で行っている伝統的な慣習であり、地域としての祭り景観の一部を構成しているという点で、個人単位で運営される祭り活動であると捉えることができる。

提灯を飾っている住宅は、旧大今里村地区では13軒、旧長原地区では25軒みられ、両地区とも全体の8割近くが古集落の範囲内に分布していた。また、4章で明らかにした継続的に住居している旧来居住者の宅地に対応させると、そのうちの6割以上が古集落に住み続けてきた旧来居住者の住宅であり、提灯を飾ると個人的な祭り活動が旧来居住者を中心として継承されているともに、古集落の範囲を超えて新しい居住者にも広がっていくことが分かった。

また、平成14年時点で継続的に住居している旧来居住者全体に占める提灯を飾っている住宅の割合をみると、旧大今里村地区で6.2％、旧長原地区で14.9％となっていた。提灯を飾るという限られた祭り活動であるものの、市街化時期が早かった旧大今里地区の方が旧来コミュニティの都市化が進んでいる現れと考えられる。

6. まとめ及び考察

表4に、各地区の市街地変容と旧来コミュニティ変容の特徴についてまとめると、

表4 市街地変容と旧来コミュニティ変容の特徴

<table>
<thead>
<tr>
<th>地区名</th>
<th>旧大今里村地区</th>
<th>旧長原村地区</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>旧来居住者の変容</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>市街化現象</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>主な市街化機能</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>転換後の変容</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>旧来居住者の動態</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>運営における変容</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（1）市街化による旧来コミュニティの変容

古集落の旧来コミュニティは、大都市の市街化の展開と密接に関わりながら変容していたため、現象としての祭り形態は類似していても、旧来コミュニティを受け継ぐ町会の役割や、運営への旧来居住者の参加は異なるものとなっていた。

旧大今里村地区では、古集落旧来の居住者が戦前の市街化の中で活動する一方、宅地分割によって転入した居住者を取り込むことによってコミュニティの規模が保たれ、祭りの継続されてきたと考えられる。戦後、転入は減少したが、旧来居住者が自宅の宅地を拡大しながら定着しており、祭り運営は「4代以上住み続けている古くからの居住者」とともに、「転入後定着した2〜3代目の居住者」が共同で支っていることが分かった。

一方、戦後になってから市街化した旧長原村地区では、旧来居住者の取り替えに伴う宅地分割が進行している段階であり、祭りの運営は、「4代以上住み続けている古くからの居住者」と「新しい転入者」によっ

（2）旧来コミュニティの今日の可能性と課題

伝統的祭りという側面で考えた場合、町会という特定の範囲を基盤とする地域組織による旧来コミュニティとの周辺居住者が共存することによって、古集落の旧来コミュニティの活動を継承することができたといえる。しかしながら反面、例えば地元の祭りに参加する町会加入者である必要があり公営住宅地の住民は参加することができないなど、市街化過程において生じた組織領域によって、地域一体となった活動が制限されるなどという問題も生じている。このような地域コミュニティ形成に対する課題をどのように克服し、どのように旧来コミュニティの可能性を活かすかについて、今後さらなる考察が必要であり、今後の課題としたい。

補注

（1）1/2,500地形図よりミクロ開発が認められる地域の範囲を判断した
（2）旧村域の基準部で今片町土地利用計画区域として昭和3〜28年、西南半島で神路土地利用計画区域として昭和7〜17年が施行されている。
（3）今村八番町会、今村九番町会、今村十二番町会、大久保七番町会、

（4）旧来住人は昭和35年から発行されているため、分析はこれ以降を対象としたのが、この時期を基盤とする大阪市都道の都道と市街化したから、研究目的を達成する上で問題ないとは判断した。

（5）宅地分割については、住宅が建てられたり旧来居住者が増えるなど、その住民の建物の利用変化が反映される最小単位であると認識し、地元住民名簿を基に各々の宅地を分割した。

（6）平成14年時点のデータから算出している。

（7）旧大今里町の指定は、旧大今里村の狭野大神宮に合併されて御神所となったため、2つの村を合わせた範囲での一つの祭りを行っている。

参考文献

1) 松本松之介他（2001）「大都市市街地における「古集落」の変容に関する研究」日本都市市街学会学術研究論文集No.36、pp505〜510
2) 阪神電鉄（1885〜1890）「1/20,000地形図」
3) 国土地理院（1911）「旧版1/20,000地形図」及び（1932,1957,1978）「旧版1/25,000地形図」
4) 大阪市都市整備局（1995）「まちづくり100年のお記録 大阪市の 区画整理一地区資料一」
5) 大阪市都市整備局（1991.3）「大阪市営住宅地域分布図」（その他の 大阪市に内発的施策住宅を含む）
6) 大阪市都市計画局（2000）「大阪市建築用途別土地利用現況図」
7) 日本特許庁（2001〜2002）「大阪市詳細図」
8) 大阪市都整備局（1995）「まちづくり100年の記録 大阪市の 区画整理」pp 203
9) 言語の歴史の